論文

自己評価への影響度の認知と心理的距離が共感的羞恥に及ぼす影響

小澤　朋美　　小徳　咲輝　　山﨑　瑞紀

本研究では，他者の行為を見て生じる羞恥感情である「共感的羞恥」を取り上げ，羞恥場面の行為者（母親，父親，親友）と周囲の反応（ポジティブ，ネガティブ）によって共感的羞恥の高さがどのように変わるか，について検討するとともに，その理由についても検討した．結果として，周囲がどう見ているかの推測が否定的な場合の方が共感的羞恥は高くなるが，周囲の反応がポジティブかネガティブかに関わらず，行為者が親の場合の方が親友の場合よりも共感的羞恥が高くなること，その理由として，家族は同じ集団成員とみなされやすいために羞恥場面での行為者への周囲の評価が自分の評価にも影響を与えるだろうという「影響度の認知」が，行為者との「心理的距離」よりも共感的羞恥の高さに影響を及ぼすことが示唆された．

キーワード：共感的羞恥，代理羞恥，観察者羞恥，心理的距離，集団成員性

1　はじめに

人は自分の行為に恥ずかしさを感じるだけではなく，他者の行為を見て恥ずかしさを感じることがある．こうした感情は共感的羞恥（empathic embarrassment），代理的羞恥（vicarious embarrassment）などと呼ばれ，共感的羞恥を引き起こしやすい個人的特性や認知要因，場面の特性，その後の行動，などが検討されてきている（Krach et al., 2011; Miller, 1996; Stocks, Lishner, Waits, & Downum, 2011 など）．Krach et al.（2011）は他者の羞恥場面を，「行為者の意図の有無」（意図して起きたものか，偶発的に起きたものか）と「行為者の気づきの有無」（不適切な行為であると気づいているか，気づいていないか）の２次元により４つに分類し，行為者が恥じらいを感じていない場合や意図的な場合でも観察者側に恥じらいが生じること，個人特性としての共感性と他者に対して感じる羞恥感情の間には正の相関が見られることを報告している．また，行為者が自分の立場をどう感じているかを想像する場合よりも，行為者の状況に自分がいることを想像する場合の方が羞恥感情が高まるといった実験結果から，観察者が経験する羞恥感情には，他者の感情の共同体験としての共感の形態と，観察者による状況の評価が反映された共感の形態があると述べている．

日本では共感的羞恥について行った研究はあまりないが，桑村（2009）は羞恥感情が喚起される状況として６場面を提示し，「自分」，「家族」，「友だち」，「見知らぬ人」が行為者だった場合の羞恥感情を比較している．結果として，共感的羞恥の高さは，家族＞友だち＞見知らぬ人の順となっており，心理的距離の近い者にほど共感的羞恥を感じやすいことを報告している．また原（2014）は，大学生を対象に調査を実施し，羞恥場面の行為者が「家族」，「友人」，「見知らぬ人」である場合に羞恥感情の喚起理由がどのように異なるかを検討した．結果として，「家族」と「友人」では，「自分も同類と思われるから」，「自分に置き換えると恥ずかしいから」の得点が「見知らぬ人」よりも有意に高くなっていた．

これらの研究結果を参考に，本研究では予備調査として 20 代の大学生男女 13 名を対象に１対１のインタビュー調査を行い，共感的羞恥の経験の有無，経験がある場合はどのような状況だったか，について聞き取りを行うとともに，３つの異なるシナリオを提示し，どう感じたか，等について尋ねた．それらの結果から，「周囲がどう見ているかの推測が否定的な場合の方が共感的羞恥は高くなるだろう」（仮説 1），「行為者への心理的距離よりも，周囲の他者から見た集団成員性の認知，すなわち，行為者に対する周囲の評価が自分の評価に与える影響度の認知の方が，共感的羞恥の高さに影響を与えるだろう」（仮説 2）という２つの仮説を立てた．家族は他者によって一つの集団と見なされやすく，自分への評価は家族成員に対する周囲の評価によって影響を受けやすいと認知するために，家族集団成員が恥ずかしい行

OZAWA Tomomi
東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科 2020 年度卒業生
KOTOKU Saki
東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科 2020 年度卒業生
YAMAZAKI Mizuki
東京都市大学メディア情報学部社会メディア学科准教授

為をしたときは，親しい友人が恥ずかしい行為をしたときより，共感的羞恥が生じやすいだろう，と考えた．本研究ではシナリオ法を用いて，以上の仮説を検討する．

2　方法

実験計画　3（行為者：母親，父親，親友）×2（周囲の反応：ポジティブ，ネガティブ）．行為者は参加者内要因，周囲の反応は参加者間要因．

実験参加者　東京都市大学の大学生 63 名（ポジティブ条件 37 名，ネガティブ条件 26 名）．

質問紙の構成

(1) シナリオ　知人の披露宴パーティで行為者が出し物をし，その時の周囲の反応が好意的である場合（ポジティブ条件とする）と否定的である場合（ネガティブ条件とする）の２種類のシナリオを作成して用いた．シナリオ中の「行為者」の語には母親，父親，親友のいずれかが入る．ネガティブ条件のシナリオは，「あなたは行為者と，知人の披露宴パーティに参加しています．プログラムが進行され，出し物を披露する時間となりました．ある２人組が出し物をする際，会場から行為者が指名され壇上に上がることになりました．行為者が芸人の真似をして一発芸を披露したところ，会場は静まり返り，嘲笑や「面白くない・・・」，「微妙・・・」といった声が周囲から聞こえてきました．」とした．ポジティブ条件では，傍線部の箇所を「会場は盛り上がり，「やるなあ！」，「最高！」といった声が周囲から聞こえてきました．」とした．（提示する際は傍線を削除した．）

(2) 共感的羞恥　行為者の行為を見てどのように感じるか，「恥ずかしい」「落ち込む」「つらい」「逃げ出したい」の４項目を用いて，「まったくあてはまらない（1）」～「とてもあてはまる（7）」の７件法で尋ねた．その他，「楽しい」「嬉しい」の２項目もフィラーとして加えた．項目の順序はランダムとした．４項目の相関は .48 ～ .86 だったため４項目の平均を用いた．α信頼性係数は，母親，父親，親友の順に .86，.87，.89 だった．

(3) 自分への評価に対する影響度の認知（以後，「影響度の認知」とする）「行為者に対する周囲の評価は，あなたに対する評価にどの程度影響を与えると思うか」という質問に対して，「まったく影響しない（1）」～「とても影響する（5）」の５件法で尋ねた．

(4) 心理的距離　Aron, Aron, & Smollan（1992）による IOS（Inclusion of Other in the Self Scale）尺度を用いて実験参加者と行為者の心理的距離を７段階で尋ねた（図 1）．得点が高いほど心理的距離が近いことを示している．

(5) 操作チェック　「会場にいる人たちの行為者に対する評価はどのようなものだと思うか」という質問に対して，「非常にネガティブ（1）」～「非常にポジティブ（5）」の５件法で尋ねた．

その他，属性項目への回答を求めた．

手続き　実験参加者はポジティブ条件とネガティブ条件の２条件にランダムに割り当てられた．授業内の一部の時間を利用して回答を依頼し，無記名式で回収した．その際，回答は強制ではなくいつでも中断できること，回答しないことで不利益を受けることはないこと等を伝えた．最後に「あなたは真面目に取り組みましたか」という項目を設け，「真面目に取り組んだ」と回答した者のみを分析対象とした（「真面目に取り組まなかった」と回答した人はいなかったため回答者全員を分析対象とした）．調査終了後にデブリーフィングを行った．

3　結果

3．1　操作チェックについて

周囲の反応（ポジティブ，ネガティブ）のシナリオが適切に機能しているかを検討するため，操作チェック項目の平均を行為者別に（母親・父親・親友）ポジティブ

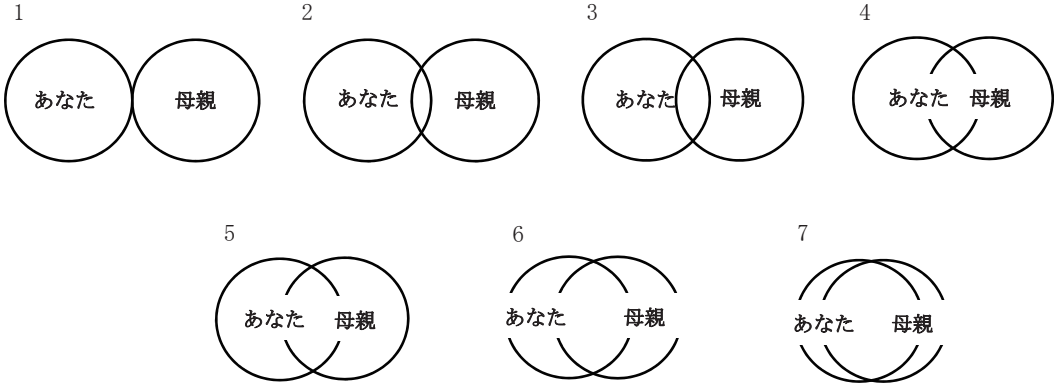

図１　母親条件の IOS 尺度（Aron, Aron, & Smollan, 1992 をもとに作成）

条件とネガティブ条件で比較したところ，すべての行為者でポジティブ条件の方がネガティブ条件よりも有意に高くなっており（$t(61) = 5.06, p < .001$，$t(40.11) = 4.01, p < .001$，$t(36.14) = 6.72, p < .001$），操作は成功していた．

3．2　行為者と周囲の反応による共感的羞恥の違い

周囲の反応がポジティブな場合とネガティブな場合での 3 人の行為者（母親，父親，親友）に対する共感的羞恥得点の平均が異なるかを検討するため，3（行為者：母親，父親，親友）× 2（周囲の反応：ポジティブ，ネガティブ）の二元配置分散分析を行ったところ，交互作用は有意でなく（$p > .05$），行為者の主効果（$F(2,122) = 44.04$, $p < .001$），周囲の反応の主効果（$F(1,61) = 23.58$, $p < .001$）が有意だった．各条件の平均を図 2 に示す．多重比較の結果，母親と父親間に有意差はなく（$p > .05$），親（母，父）と親友間で有意差が見られた（$p < .001$）．行為者が親の場合の方が親友の場合と比べて共感的羞恥が高くなることが示された．また，共感的羞恥におけるネガティブ条件の得点はポジティブ条件の得点よりも有意に高かった（$p < .001$）．

3．3　影響度の認知と心理的距離が共感的羞恥に及ぼす影響について

(1) 行為者と周囲の反応による影響度の認知，及び心理的距離の違い

羞恥場面での行為者（母親，父親，親友）によって，影響度の認知が異なるかを検討するため，3（行為者：母親，父親，親友）× 2（周囲の反応：ポジティブ，ネガティブ）の二元配置分散分析を行った．行為者の主効果（$F(2,122) = 10.29$, $p < .001$）のみが有意であり，多重比較の結果，母親と父親間に有意差はなく（$p > .05$），親（母，父）と親友間で有意差が見られた（$p < .001$）．心理的距離についても同様に，3（行為者:母親，父親，親友）× 2（周囲の反応:ポジティブ，ネガティブ）の二元配置分散分析を行ったところ，行為者の主効果（$F(2,122) = 3.12$, $p < .05$），周囲の反応の主効果（$F(1,61) = 6.80$, $p < .05$）とも有意であり，交互作用は有意でなかった（$p > .05$）．心理的距離は母親が最も近く，親友，父親の順となっており，多重比較の結果，母親と父親の間に有意差が見られたが（$p < .05$），父親と親友間では有意差は認められなかった（$p > .05$）．影響度の認知と心理的距離の各条件の平均を図 3，図 4 に示す．

(2) 影響度の認知と心理的距離が共感的羞恥に及ぼす影響

影響度の認知と心理的距離のどちらが共感的羞恥に影響を及ぼしているかを検討するため，「影響度の認知」と「心理的距離」を説明変数，共感的羞恥を目的変数として，ポジティブ条件，ネガティブ条件を合わせて，羞恥場面での行為者（母親，父親，親友）ごとに重回帰分析を行った（図 5）．変数間の相関を表 1 に示す．母親及び父親の場合，「影響度の認知」を統制すると「心理的距離」からの有意な影響は見られないのに対し，「影響度の認知」は「心理的距離」を統制しても共感的羞恥の高さに有意な影響を与えていた．行為者が親友の場合，どちらの変数からも有意な影響は見られなかったが，ネガティブ条件のみでの重回帰分析結果では「影響度の認知」から有意な影響がみられるが（$\beta = .45$, $p < .05$），「心理的距離」からの影響は有意でない（$\beta =$

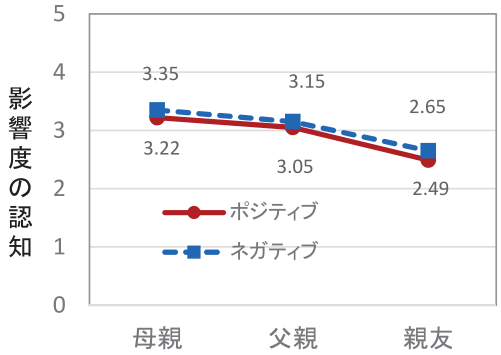

図 3　行為者による場面別評定平均（影響度の認知）

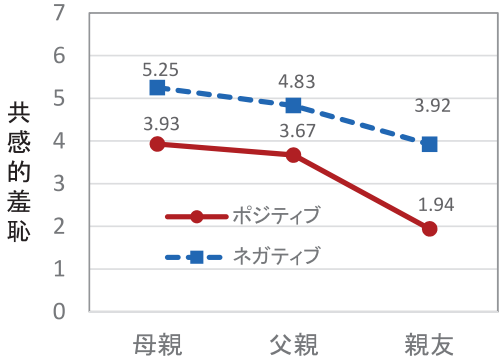

図 2　行為者による場面別評定平均（共感的羞恥）

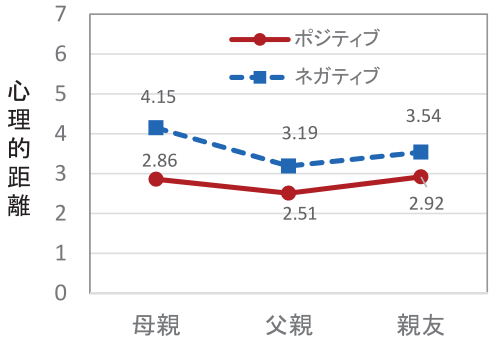

図 4　行為者による場面別評定平均（心理的距離）

－ .16, n.s.), という母親, 父親と同様の結果が見られた．ポジティブ条件のみでの重回帰分析結果は，ポジティブ条件，ネガティブ条件を合わせて行った結果とほぼ同様のものとなっていた．

4　考察

4．1　共感的羞恥に影響を及ぼす認知要因について

全体として，羞恥場面の行為者に関わらず，共感的羞恥得点は周囲の反応がネガティブな場面の方がポジティブな場面よりも高くなっており，「周囲がどう見ているかの推測が否定的な場合の方が共感的羞恥は高くなる」という仮説 1 は支持されたと言える．また，周囲の反応がポジティブかネガティブかに関わらず，行為者が親の場合の方が親友の場合よりも羞恥感情が高く喚起されており, この結果は桑村（2009）と一致していた．

本研究ではさらにその理由として，家族は同じ集団成員であるとみなされやすいために，羞恥場面での行為者への周囲の評価が自分の評価にも影響を与えるだろうという「影響度の認知」が，行為者との「心理的距離」よりも共感的羞恥に強い影響を及ぼすという仮説についても検討した．結果として，行為者が親（母親，父親）の場合の方が親友の場合よりも羞恥感情が高く喚起されていたが，父親と親友の心理的距離には有意差が見られなかったこと，影響度の認知は親（母親，父親）の方が親友よりも有意に高くなっていたことから，少なくとも羞恥場面の行為者が身近な関係の場合には，共感的羞恥は心理的距離よりも影響度の認知によって生じる可能性の高いことが示唆された．すなわち，行為者と自分を重ね合わせて行為者の痛みを感じるというよりは，同じ集団であると他者に思われることで自分への評価が下がるのではないかという懸念によって羞恥を感じやすくなることが考えられる．

また，「影響度の認知」と「心理的距離」を説明変数，「共感的羞恥」を目標変数とした重回帰分析結果においても，他方を統制した場合には，「心理的距離」から共感的羞恥への有意な影響は見られないのに対し，「影響度の認知」は共感的羞恥に有意な影響を与えていた．これらの結果により，「行為者への心理的距離よりも，周囲の他者から見た集団成員性の認知，すなわち，行為者に対する周囲の評価が自分の評価に与える影響度の認知の方が，共感的羞恥の高さに影響を与えるだろう」という仮説 2 は支持されたと考えられる．

4．2　本研究の限界と今後の課題

本研究では，心理的距離が共感的羞恥の高さに影響するというモデルの下で重回帰分析を行ったが，羞恥場面を読んで生じた共感的羞恥が心理的距離に影響した可能性もある（他者の行為に対して感じている羞恥感情の強さから，他者との心理的距離を推測するなど）．また，心理的距離や影響度の認知の変数については事後的に尋ねており，実験で操作していないため，今後はこれらの点を改善し，さらに検討する必要がある．

また本研究では，近い関係の行為者の羞恥場面を取り上げたが，見知らぬ人の場合にも共感的羞恥は生起することが繰り返し報告されているため（Krach et al., 2011; Miller, 1996; Stocks et al., 2011 など），今後は見知らぬ人も対象とするほか，多くの羞恥場面を設定し，共感的羞恥の生起過程について検討していく必要が

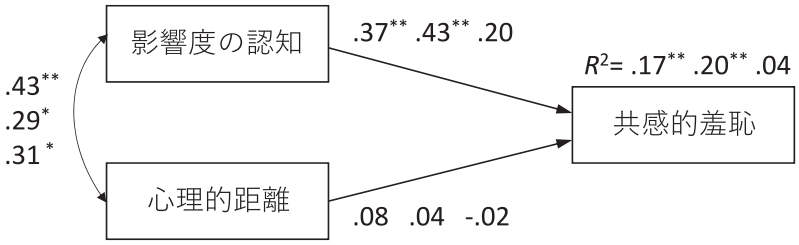

図 5　重回帰分析結果（母親，父親，親友）*p<.05, **p<.01

表 1　変数間の相関

	母親		父親		親友	
	1	2	1	2	1	2
1. 共感性羞恥						
2. 影響度の認知	.40 **		.45 ***		.20	
3. 心理的距離	.24	.43 **	.17	.29 *	.05	.31 *

あるだろう.

参考文献

［1］ Aron, A., Aron, E. N., & Smollan, D.（1992）Inclusion of Other in the Self Scale and the structure of interpersonal closeness. *Journal of Personality and Social Psychology*, *63*, 596-612.

［2］ 原奈津子（2014）観察者と行為者との関係性が観察者羞恥に与える影響　日本心理学会大会発表論文集，*78*, 2EV-1-016.

［3］ Krach S, Cohrs JC, de Echeverría Loebell NC, Kircher T, Sommer J, Jansen A, et al.（2011）Your flaws are my pain: Linking empathy to vicarious embarrassment. *PLoS ONE*, *6*, e18675.

［4］ 桑村幸恵（2009）共感的羞恥と心理的距離　パーソナリティ研究，*17*，311-313.

［5］ Miller, R. S.（1996）Embarrassment: Poise and peril in everyday life. New York: Guilford.

［6］ Stocks, E. L., Lishner, D. A., Waits, B. L., & Downum, E. M.（2011）I'm embarrassed for you: The effect of valuing and perspective taking on empathic embarrassment and empathic concern. *Journal of Applied Social Psychology*, *41*, 1–26.